阿道香港《

熱田宿(宮宿)

熱田神宮をひかえていたので"宮宿"とも言われた。 宮の門前町として、湊町として発展。桑名への渡し 場、脇街道佐屋路,美濃路の分岐点であったので 大変賑わった町。更に名古屋城下の表口でもあった。 ので街道随一の規模を持った宿場であった。人口10342 本陣2、脇本陣1、問屋場1、舟会所1、旅籠248軒 町並み:東海道の方11町15間余 美濃路の方25町17間余:佐屋路の方2町40間 当時人口は大津、府中についで3位、旅籠の数は1位 (享保10年熱田宿助郷帳)

家康幼時幽居の跡

家康の父宏忠は今川に従属のため妻於大と離縁 竹千代(家康)を今川に人質に出すべく駿河がに 向う途中田原の戸田康光に騙され織田信秀の元 に送られた。信秀は加藤図書助順盛に預けた 当時竹千代は6歳、2年ほどここで過ごす。 信長の兄信広との人質交換で今川に移される。

裁断橋址

秀吉の小田原北条攻めに堀尾金助(18歳)は初陣 参加、武運なく陣中で病死、愛児を亡くし悲しんだ 母が33回忌の供養に裁断橋を架け替える。 ここを通る人々に子の為に念仏を唱えてほしいと願う。 金助は尾張国丹羽郡御供所村の出身。

富部神社(祭神素戔鳴尊ほか)

戸部村の氏神若宮八幡社であったが慶長8年(1603)津島神社から分身を勧請。清洲城主松平忠吉が 病気平癒の謝恩とて本殿、祭文殿、回廊を慶長 11年(1606)建立。本殿(国重文)、三間社流造り・ 桧皮型銅版葺、正面蛙股、屋根の懸魚、桁隠など は安土桃山時代の様式がみられる。

戸部城址

城主戸部新左衛門は織田信秀の配下にあり、今川 氏親(義元の父)の娘を妻としていた。信秀の死後 今川方に属したので離反させようと信長は新左衛門 の筆跡を家臣に一年間も習わせ、戸部氏が信長に 内通している旨の手紙を側近森三左衛門に持たせ 今川城下へ。義元は激怒、新左衛門を呼つけ切腹 させる。以後戸部城廃城。家臣は離散 信長の計略成功。



このとき彼の身の回りの世話をしたのが井戸田の里長 横井氏の娘槐(かい16歳)師長43歳、二人は年の差も 忘れ深い仲となる。それも長くは続かず師長は一年で 京に帰ることになる。土器町(今の枇杷島町)まで送るが 名残は尽きず悲しみのあまり師長から貰った白菊の琵琶 を抱いて川(庄内川)に投身。琵琶の裏に

"四つの緒の調べも絶えて三瀬川 沈み果てぬと君に伝えよ"

笠寺観音(笠覆寺:真言宗)

聖武天皇・天平5年(733)創建、善光上人が 呼続の浜に漂着した霊木で十一面観世音菩薩 を刻み小堂を建て安置したのがはじまりと言う 小松寺と称した。

その後寺は荒廃し、観音像は野ざらしになった これを哀れんだ鳴海の長者の侍女が自分の笠 をかぶせ雨露しのいだ。このことが東下り途中 の藤原兼平の耳に入り、都に連れて帰り妻とした 下照好。延長8年兼平は姫を伴って訪れる。 現地に寺を再建、笠覆寺とする。

境内には芭蕉、知足、素堂らの句碑、春雨塚 宮本武蔵の供養塔がる。

原師長謫居跡 "笠寺や もらぬ岩屋も 春の雨" 芭蕉翁青桃

尾張四観音(笠覆寺、荒子観音、竜泉寺、甚目寺)の1つ

白臺寺(年魚市潟勝景碑)

呼続から星崎にかけては遠浅の沿岸 で年魚市潟と呼ばれ景勝地であった "年魚市潟潮干にけらし知多の浦に 朝漕ぐ舟も沖に寄る見ゆと万葉集に 境内に芭蕉句碑

"はる風や 戸部山崎の 屋根の苔" 江戸時代、年魚市潟には塩田が開け

た。"前浜塩"と呼ばれ一時尾張地方 の塩の大部分を賄ったという。 江戸末期に新田開拓で消える。

見晴台遺跡

城主佐久間信盛

桜駅

₹増防

玉照姫

ゆかりの書

笠寺台地の中央の東端、中世の干拓による 新田開発までは周囲は海が迫っていた。 昭和16年銅鐸型土器が発見され全国的に 知られる。弥生時代遺跡:住居跡、土器類 古墳時代以降の須恵器。中世の磁器。 中国銭なども資料館横に復元された住居あり。

笠寺西門交差点 見晴台遺跡 **三**元

